

岐 蘇 林 友

目 次

滋賀縣下に於ける林區署直營……	岡 西 萬 秋
砂防に就て(二)……	岡 西 萬 秋
岐蘇林友發行に關する意見	都 竹 武 次 郎
林友につきて……	輪 湖 正 由
岐蘇林友とメス……	鷹 見 勳
灌漑農事試驗場……	米 山 芳 郎
懐友錄……	越 吟 山 人
青森通信……	松 館 藤 太 郎
ハガキにて……	松 島 生
彙報……	
特別廣告……	校 友 會
編輯便り……	

六十一 滋賀縣に於ける林區署

直營砂防工に就いて

岡 西 萬 秋

第三 工法及植樹

現在施工せしめられつゝ、ある工法及必要材料等の詳細は別紙仕様書の通りなるを以て茲には之を省略す

砂防工事功程表(大正八年より平均)

工 種	一人一日功程	摘 要
藁積苗工	三K〇	法切階段切込みより仕上げ迄一式
筋工	一〇K〇	同 右
甲種粗朶伏工	一坪五	同 右
乙種粗朶伏工	三坪〇	同 右
積芝工	二K〇	土砂掻根堀より仕上げ迄一式
水路張芝工	二坪〇	土砂掻固めより積立迄
山腹石積工	〇坪六	石拾ひより根堀り積上迄一式
谷止石積工	〇坪四	同 右
藁伏工	四坪〇	法切溝堀より仕上げ迄一式

砂防工事創始時代には松苗を植栽するを以て唯一の適樹となしたるも其の生育不良にして甚敷い數年ならずして悉縮し枯死するものありたる故に赫山は如何なる樹苗が最も適當なるを官民共に苦慮を費しつゝ、ありしが甲賀郡岩根村龍池藤兵衛なる者明治十七年の頃山檀の禿兀地に最も効果あることを實驗したる以來砂防樹は一に山檀を以て最適となすに至れり山檀(ヤマバリ)又は姫ヤシヤブシ)は双子葉植物にして樺木科の半喬木なるが故に樹幹は偉大の伸長をなさずと雖も根部は平根性にして枝葉の發生頗る多く相互錯綜四方に擴張し土砂を扞止して地盤を安定ならしむるのみならず根部には共生菌寄生して克く瘠瘁地に堪へ其の種子は飛んで天然に發芽し然も發育速かにして落葉地衣を作り土地を常に濕潤ならしむの効偉大なる事實あり當署に於ては目下之れを主木としてヤシヤブシ及赤松共に混植しつゝ、あり工事施行を終りたる時積苗階段の馬踏及筋工被覆工たる粗朶伏面及藁伏面に等て植栽す山檀及ヤシヤブシは成木の曉は之れを燃料又は粗朶伏工用に供するの外薪材としては利用價值多きのみならず煙草盆菓子入器小箱等木細工として利用せられ尙之れが工藝的利用方法の研究を重ねるに於ては其の價值大に昂るべしヤシヤブシは山檀と同葉同科に屬し其の發育の迅速なること遙かに山檀を凌駕するを以て砂防工の効果を達せしむ上に於ては近時之れが植栽を粗導せらるゝ、植苗は二三月頃植栽すべき地を掘起し其の土砂を細末にして肥料木灰藁灰又は過燐酸石灰を一本當り三匁乃至五匁位を施し幹先を切斷したる七八寸の苗木を植付くるものとす植栽苗木は山檀ヤシヤブシ共一年生赤松は二年生のものを使用す

各工種單位當りに對する植栽本數

工種	工料	山體	ヤシヤ	赤松	計
藁積苗工	一	一	一	一	三
筋工	一、五	一、五	一	一	三
粗梁伏工	坪三	坪三	坪一	坪六	坪九
藁伏工	坪三	坪三	坪三	坪九	坪九

平植となすものは各種苗木を混じり該地の状況に應じて面一坪に對し三本乃至九本を植栽す

第四地質

滋賀縣下に於ける各國有林の地質に就ては精細に研究を重ねたることなく且つ之に關する智識に乏しきを以て遺憾乍ら茲に詳述する事を得ず唯單に見聞したる國有林關係河川流域の地質に就て概要を記載するに止め以て諒察を乞はんとす國有林に水源を發し又は國有林に關係を有する大戸、野洲、家棟、日野等の諸川は勿論滋賀縣下に於ける諸流は水源地と琵琶湖との距離短少とし山岳の地質は主として秩父古生層にして殆んど其の半を占むと言ふ花崗岩之れに亞き稀に第三紀層を混成す今其の分布を砂防工事施行の國有林關係河川流域に概別せん

イ 大戸川湖南東地にして主として花崗岩にして僅かに信樂谷及一丈野外五國有林方面に第三紀層を有す

ロ 草津川湖南東地にして上流即ち國有林附近は花崗岩にして中流に至り秩父古

生層及第三紀層あり
ハ野洲川 湖東地にして本流は秩父古生層最廣く花崗岩之に次ぎ第三紀層は中流以下に存す

ニ家棟川 湖東地にして全部花崗岩とす

ホ日野川 湖東地にして上流は廣大なる秩父古生層なるも流域全体より言ふ時は第三紀層と云ふを得へし

ハ鴨川 湖西地にして國有林附近は石英多き花崗岩なり

第五 砂防設備の効果

滋賀縣下に於ける國有林砂防は昨年度末迄に八百三十余町歩に達し之れを總禿面積に比すれば其の約九割に及ばんとす歳を閱すること茲に五十年に無んどす當初の施行に係るものは成績不良にして畫餅に歸したりと雖も不撓の工事遂行は近年漸く其の効果を認め得るに至り相生保護區部内宇山南谷國有林の如きは滿山の半其の裸体を蔽ひ其の地元部落たる上田上村地内の河底は約六尺を低下し下流たる草津川の如き上流四尺中流二尺の河床低下を見たり草津町に於て本流を潜れる國有墜道の如き河床下降の爲めに底張石覆出し之れが維持に努めつ、あり野村郡下家棟川墜道に於ても同一の現象を呈せり斯くの如き喜ぶべき現象は至る所に見るを得べく又砂防植栽地の如き植栽山稜の成績佳良にして克く鬱閉成林し林下一帯の朽土は其の深さ六七寸より一尺五六寸に達したる爲めに利用價値多き有用喬

生樹木の育成に適するに至り茲に砂防樹林を發して一般材料に更新するの要を認め後繼樹の穿索に努めつ、ある状況となれり茲五十年前の過去山骨稜々として起伏し禿山赫丘の蜿蜒たりし慘狀を想見するに及び適切なる技術と一貫の至誠とを以てせば砂防目的の大効果を收め得ること決して至難事にあらず要するに既設砂防工事は國土保安を維持し土地生産力の回復増進に向つて進みつ、あること明かなりとす

終りに林區署に於ける砂防工事様書を述べ題を結ばんとす

岐蘇林友發行に關する意見

都 竹 武 次 郎

拜啓本年一月號林友誌上に御提案相成候林友發行に關し所見開陳致候

一、林友發行事業を獨立經濟に依る事は時節柄至極妙案と存じ賛成仕候 此儀に就いては校友諸君中別段異議可無之と信居候

二、發行の維持費年額六拾錢餘出も結構と存候必要あれば壹圓位迄増額如何に候哉

尙其收金方法に就いては曩に雜誌部迄私信を以て申上候通り集金郵便の方法に依られん事を建議仕候 事實年額六拾錢乃至壹圓位の離出金は互よく失念するものに有之假令取廻め前納したるものにてこそが「何年何月分まで」

など手記する諸君は少きものと存候又少額の金員を送る事は仲々うるさきものと存候遂に等閑に附し易きものに有之候間是は毎年度始に於て一ヶ年分宛を前納候様集金郵便の御取扱相成度候 その方相互に便利にて且つ手數省略かと信じ候現下大抵の温交機關の會費徴收は概ね斯の方法に依らる、様相見受申候 尙本法實施上婆心までに申上度は校友諸君は何れも聽掌柄出張不在勝に候へば「本人不在の場合に御立替御支拂ひ被下度候」式の符箋にても施し發行相成るがよろしからんと存候官達の際は存じ不申候へ共大抵の會社商店等にては斯る場合其使用人の爲立替拂の途は有之候

三、前金徴收實施候へば基金充用の儀にも可不及存候

四、如上三項の結果として既納金精算必要と存候

吳々も前金徴收實施を切望仕候實施の曉に於てその支拂不忠實なる校友は一人も可無之候 且又集金郵便を差向る事が何となく禮を失したるが如く考ふるは畢竟思ひ過ぎの類にて却つて相互の手數を省略し得る好制度と可稱候

尙維持費の点についても年額壹圓位に増額し林友各號の内容外觀の充實を計るとか増刊を發行するとか又は年一回頒布の會員名簿の様式を整へるとか致したき事等は校

友諸君一般の素懐と存候 而して本件の實行に就いては一々遠隔各地に存住する會員全般の意見を取纏むる事は至難の業につき福島在住の卒業生を以て代表者と見做し右代表員と在校會員との總會の決議を以て充分と存じ勿論小生も右總會の決議に一任するものに御座候 以上

林友につきて

輪 湖 正 由

母校とは久敷く音信を絶つ久振りにて懐かしき林友誌(一月號)を手にし候尤も林友誌は毎月御發送下されしならんも小生業務異動の爲めに一昨年正月より再び鐵道省大臣官房保健課に出仕致候こと、相成りし爲前經營會社宛毎月御發送下されしならんも初めの間は轉送ありたれども其中に忘れたりと見れば轉送なく今回母校よりの分遣かに入手致候

一月號本誌上に發表の協議事項並に林友維持に就き聊か卑見を開陳編輯當路諸賢の御參考に供し度候

一、一月號の特別廣告の協議事項は大休に於て可

二、校友會報誌を月刊となし岐蘇林友と改題百六十號迄續刊せられたる編輯當事者の苦心經營の程は謝意を表し居り候

されど月刊を年二回發行となす事

月刊結構なれど内容の充實と經營の點よ

岐蘇林友ミメス

鷹 見 勳

冷凜な輝に侵し難い崇美さを持つて居る

- 目 次
- 研究
- 校報校友會報
- 文 苑
- 會合、學生會記事
- 雜 錄
- 維持費離出者氏名
- 等
- 以上

友 林 蘇 岐

寶玉に一点の塵芥は、私達の心裡の神殿味に左程の曇を興へ得る物と考へられぬが、瑕瑾の跡も無い珠玉に加ふるに瑕瑾を以てすれば余の情無さを覺わしめる、此意味に於て前同記事中の誤植を訂正して、私が編輯した生活の中に流筆を握つて材料の貧弱さを表明した時の、意志の幾何か、通ずる程度に補つて置き度い。

- 頁 行 誤 正
- 三 中 一 美有新 萬有新
- 同 同 同 天氣 天地
- 同 同 二 吐合 吐合
- 同 同 八 置守 墨守
- 同 同 同 何事進展 何等の進展
- 同 同 三 美象 萬象
- 同 同 四 生活の瞬 生活の瞬
- 同 同 二 九 自分義務 自分の義務
- 同 同 三 〇 ことについて ことに就いて
- 四 中 九 「卒業に對して」 「卒業生に對して」

同 同 一 三 看察 省察

同 同 一 三 看察 省察
私達の生活に満足の喜びのみを認識して不満なるもの、存在を感得し得ないと云ふ事なれば、其れは所謂長期の修養の賜とも考られ様けれども、私は他の一方より觀察して、希望無き生活行詰れる心理状態とも云ふ事が出来ると思ふ、血潮の赤い私達の生活に於ける物足りなさの息には、何時の時代にも將來の進歩發展を期する祝福すべき芽培はれて居ると思ふ

此尊むべき物足りなさの感念を私達は岐蘇林友に對しても、持つて居るの光榮を有して居る、其れは一つや二つの物足りなさでは無く、幾箇かの問題を讓して居る、且つ單に祝福すべき芽と考へるには余り數量が多過ぎる位である否寧ろ多過ぎると断言すべきである、尤も之は私一個の見方かも知れないが兎に角此數個の問題を机上にして、如何の方面から私達の心の空虚を満たし希望の幾分かを満足せしむるべきかは差當の問題であらねばならない、勿論満たさる心の全部を一時に満たし度いのは吾等の心裡であるが、多くの場合は其處に種々の波乱曲折の障礙があるから、最も當面緊要な問題から心の満足を求むるの方法を盡すべきであらう。

假令ば岐蘇林友に就て體裁や形式の改革が其内容の改善よりも、緊急を要すべきものであるならば記事内容を改むる前に、先づ以て體裁や形式を變へるのも一の方便であらう、仄かに承つて居る編輯部の方々の近頃至極御熱心に宣傳されて居る分形式の改善とか云ふのも單に無意義に提唱されて居るのではなくして、充分此点にも御注意されてあることと思ふ、察するに體裁や形式の變換と云ふ事が何より刻下の急務であるかも知れない

友 林 蘇 岐

私達は祖先傳來の田畑を古い時代の鐵のみを以て耕作する許りが能ではない、改善の叫進歩の聲は須臾も私達の耳朶から離るること許すべきではない。

滿鐵農事試驗場林産科より

米 山 芳 郎

私も渡滿後早や四ヶ年の日月を過ぎ去りましたが何等爲したる所なく誠に面目も無い次第であります母校の卒業生で滿鐵へ入社せられた方は先輩諸氏三名と私とで四人かと思つて居ます然し現在では撫順炭礦に居らる、大久保五成氏と私の二人だけの様に思はれます他の退職せられた方は一入は目下長野縣廳に居らる、野澤博氏で大正八年頃まで管試験場に居られたと思ひます又もう一人の方は林友の名簿に不明となつて居ますが目下北海道廳に居らる、小松六三郎氏で大正八年の春まで鄭家屯の試作農場に勤務せられて居ました私も本社へ赴任間も無く前記小松氏の後任として鄭家屯へ在勤を命ぜられ一年余にして滿鐵の社員大整

樹種	産地	量	重量	粒數	純重量	發芽率	備考
シナアカマツ	蓋平	五合	五三〇、〇	三六、九一	二、八	九六、六%	大正十一年
マンシウ	同	五合	五四〇、〇	一八、三二	一、六	九七、八%	秋採集せる
クロマツ	奉天	一合	五七二、〇	一三、九二	三、七	九六、五%	種子に付調
同	鐵嶺	一合	八五九、〇	一〇、九六	四、九	九六、〇%	査

理に出會し鐵嶺に缺け生じ直ちに轉動を命ぜられ在勤すること滿二ヶ年余をして昨年當地へ希望轉動して現在に至つた様な次第であります
次に過日征矢君を通し松種子寄贈に就て御伺ひ致しました處早速御承諾下さいましたので本日別紙の通り郵送致しましたから御査収下さい
本年は關東廳朝鮮總督府林業試驗場同水原模範場威鏡南北兩道廳其他二三ヶ所から依頼され送附しました當場にては松類の試験としては滿洲産の赤松黒松の外滿洲にて多少得らる、テウセンマツ、シロマツ、朝鮮からテウセンカラマツ、長野縣からカラマツ、アカマツ、外國からオウシウアカマツ、ドイックロマツ、パンリスマツ、リギダマツ、ドイットウヒを取寄せ適否試験を行つて居ます

亦滿洲産の赤松黒松は播種量坪當八勺位が最も成績良好にて山出苗は二年生にて苗高十四呎の根際直徑六五粒を以て標準とせられて居ます要するに滿洲は四五月頃風が非常に多く其爲めに枯損甚だしく大苗にては到底良好の活着を得られませんで苗は小さくとも丈夫な苗を養生する事に努力して居ます
次に滿洲には樹木の種類少なき爲め各地から見本園用苗木として多少集め度いと考へて居ます其れに就て御地方にて有する樹木中滿洲にも適するかと思はれる様なものが有りましたならば御世話を御願ひ致し度いので御座います如何でせう亦母校にて當地のもの御入用なれば送りますから御知らせ下さい次に参考までに當見本園に有する樹木を御知らせします(當地の氣候は七月が最も暑く最高平均気温三〇、一度であつて又寒さは一月が最も寒平均最低気温一五、四度降水量は年六一五、〇耗蒸發量は年一三七四、二粒であります)

いてふ
てうせんからまつ からまつ

しなあかまつ まんしうくらまつ
りぎだまつ あうじうあかまつ

てうせんまつ りぎだまつ
 △てうせんもみ △てうせんはりもみ
 △たうしらべ このてがしは
 △さはぐるみ しなさはぐるみ
 まんしうぐるみ
 △おにぐるみ △ひめぐるみ
 てりはごろ しもんごろ ぎょうのき
 △てうせんやまならし △やまならし
 ざんごる もにりやまならし
 びらみつとやまならし しだれやなぎ
 こりやなぎ きぬやなぎ さはしは
 おほばはればみ おほつのはればみ
 △たうかんば △しらかんば
 まんしうしらかんば はんのき
 やまはんのき くり くぬぎ
 △あめりかがし ならがしは かれは
 もんごりかれは △あめりかかれ
 こぶにれ のにれ ねぞねのき
 △てうせんねのき △げやき はりげやき
 くは類
 ひめぐし
 うすばいはいくはうつき
 いはうつき
 あんず まんしうあんず すも、も、
 おひようも、ゆすらうめ
 こにはざくら △みやまざくら
 えぞうはみづざくら やまざくら
 てうせんやまざくら なし づみ
 あづきなし さんざし みさんざし
 △ほぎなき、かまご

うすげんもつけ てうせんこでまり
 やましもつけ 一重のしゝみばな
 つるのいばら
 やまはまなす きばなはまなす
 はまなす いぬわんじゆ わんじゆ
 さいから にせあかじや いたちはぎ
 はぎ ふぢ △こうらいにはふじ
 △てうせんこしゆ
 きはだ ひろはのきはだ
 しんじゆ
 ぬるじ △うるしのき
 つるうめもぎ ころづる にれき
 ひめまゆみ からこぎかへで
 ねぐんどかへで いたやかへで
 まんしういたやかへで
 てうせんはうちかへで おにめぐすり
 もくげんじ △ぶんくわんくわ
 だふりかくらうめもぎ
 なつめ
 つた てうせんやまぶどう
 あひうるしなのき まんしうしなのき
 わのきうつき
 ぎようりう
 △やなぎばぐみ
 △まんしううこぎ
 たらきの はりざり
 とねりこ やちだも おほとねりこ
 △あぬりかどねりこ
 △れんげう いばたのき
 はしごい おにはしごい やまはんごい

むらさきはしごい こはたご
 かたるば)あめりかきさ(げ) きさ(げ)
 すひかづら △にはごこ
 △かんばく
 おほべにうつき
 ひとつばはぎ
 △くさにんじんぼく 以上
 (但シ△印ハ一二本有スルノミ)

懷 友 録

越 畔 山 人

△大正十二年二月公用を帯びて長野に至るや久淵を叙するもの曰く市川豊二氏森戸吾良氏長谷部眞一氏岩井洋治氏金井澄水氏宮崎惠喜太氏然して初対面の倉科浦一郎氏其他野澤傳氏外二三未知の人も見わた
 而して此夜十年振りにて市川長谷部二君と鴻静館の一室にて肉鍋をつ、く因みに市川君は肉附豊かに短髪を貯へ恰暢天晴れの紳士振りである長谷部の好禿振りには既に昨春千葉に於て面喰つた岩井君又分髪の際セントルマンとして大に變つて居る
 △其節も話した事であるが卒業後同窓には中々遭ふ機会が無いが山人の如き漂流浪人には比較的遭つた方かも知れぬ、即ち其話の延長として此稿を起す尤も嘗て物した東西南北の連続とも見て頂き度い
 △前記出張の經由地福島縣喜多方小林區署に於ては偶然二木季人氏(十一回)に然かも

途上にて遭つた、昨冬出張の際不幸不在であつたが今回も時間切迫の爲めに單に「ヤア」「ヤア」で別れて了つた
 △大正八年春僕が福井縣へ赴任するや小濱林産株式會社に一回の福田友次郎氏あり手腕家として縣郡あたりからも推服されて居た其後僕が群馬縣に轉じてから山林賣買仲介測量設計などで獨立した通知に接したが間もなく訃報を聞いたのは返す／＼も惜しい
 △之も福井時代隣縣石川の或郡から代田文之助氏(十回)から便りを頂いたが遂に面接の機を失した
 △大正九年秋群馬縣に出向を命ぜらる、や同窓をして梶田實治氏(十五回)あり初対面である中々に左手黨とは承はつたが不幸にして其手並は拜見せず今は岐阜縣にあり
 △大正九年夏歸省の際新潟縣廳に服部啓次郎氏(八回)を訪ふ何しろ學生時代から一方の雄であつたが茲に於ても潜勢力侮る可らざるものありと睨んだは僻目か
 其節二回の遠藤治一郎氏にも初見參したが其辯論家たる事は推して知つたが法律方面にも明るいどの歎稱も聞いた
 佐渡行の船中では矢張り一縣吏から公有林整理で或村では晝飯晩飯抜きで夜深更まで口説いた揚句遂に根氣で負かしたといふ逸話も聞いた、宣なる哉今や小林局に拔擢されて益々快腕を振ひつ、ありと幸に自愛を祈る

△大正十年春僕が家庭の事情から東京戻りを餘儀なくさる、や恩師川崎本雄(四回)氏を大に煩はしたが不幸にして間もなく長崎縣に轉任されたのは残念であつた、然し何かしなればやまぬ人である多々益々辨せん事を切に至囁々々
 右川崎氏と共に一回の遠藤宗作氏にも御厄介になつたが今も猶其配下として働きつゝ、あるから憎れ口は御免を蒙る但氏は故高種氏と共に本多博士の激賞を受けたゞけあつて稀に見る秀才である事は敬服の外はない今や大東京を脊負つて木炭のオーソリテイーとして盛んに活躍されつゝ、あるは蘇門の誇りとする處である
 △大正十一年中東京にて宇佐美周紫氏(二回)に再會したが相變らず手も八丁口も八丁行くとして可ならざるはなく實に新潟縣副業獎勵主任として大いに敏腕を振ひつゝ、あるは適所適材を申すより外なし、僕の同僚曰く「アレは新潟縣の技師か」外に名古屋木材の脇田義正氏(五回)にも初対面した温厚の君子である
 △同年春寒然親友神作四郎君(十回)の來訪を受けた大した變り方である宿の婆さんは年四十と見る又共に日比谷にブラツイた時僕の同僚達は「君の親爺かい」といふ程も其時は眞物の親父も上京中であつたのだ其後依然音沙汰がなかつたが先頃又々上京との便りあり
 △第三十二回大日本山林會の千葉市に開か

る、や集まり會する者左の如し
 岐阜縣 吉田佐十郎氏 (九回)
 新潟縣 松澤莊太郎氏 (六回)
 長野縣 長谷部眞一氏 (十回)
 同 渡邊 智則氏 (同)
 同 金井 澄水氏 (五回)
 同 宮崎惠喜太氏 (同)
 及東京府の山人の七名なり但以上は山人の知れる者若くは面會したる人々にて他にもありしかは知らず山梨縣の前田正義氏の名はありたるも見えず前記吉田氏とは兩國驛より偶然同車し又松澤氏は新潟縣宿舎にて親子三人厄介になつたり殊に長野組には爾後第一施行中始終行動を共にして大いに學窓氣分に侵れり茲に記して厚意を感謝す
 △十一年夏駒場に講習會あり一夕蘇門出身の懇親會を開く場所は東京北日本食堂人は
 長野縣 金井 澄水氏 (五回)
 石川縣 辻 敬二氏 (二回)
 鳥取縣 宮下 孝美氏 (十三回)
 静岡縣 立道 乙松氏 (十七回)
 及山人の外特に出席したる山下藤一氏(三回)の六名尙講習中長野の塩川金次氏(八回)の顔も見えた
 其他二三氏ありたるも記憶になし
 △毎年春季小林區署長會議の開かる、や東京大林區署及東京府廳の有志相應じて晚饗會を開くを例とせり即ち此二三年顔馴染となりたるもの左の諸氏を記憶す

友 林 蘇 岐

東京大林區署
上條嘉一郎氏(四回)
鷺澤 忠治氏(同)
同 實高 積二氏(十六)
同 中村 豊治氏(一回)
同 高橋 作次氏(一回)
同 齋藤 正雄氏(一回)
同 遠藤 宗作氏(一回)
同 山下 藤一氏(三回)

此外二三の子及山人あるも常に顔は違へり即ち第一回は神田の當盤に第二回は日比谷の幸樂に大いに仲乗さんを宣傳したり右に付山人常に遺憾とするは御料の人及東京在住諸氏の顔を見ざる事なり

尤も折悪しく出張等の爲めに參會せざる東京府の肥田幸一郎氏(四回)及東京大林區署の吉澤英雄氏(十回)あり肥田氏には同構内にある關係上屢々面會し特に最近は一佳人を得て頗る平和に暮らさるゝとの事蓋し福徳の然らしむる處、羨む事然り又吉澤氏とは電車にて數回遭ひ久瀧談に花を咲かしたり

△茲に一つ面白からぬ事あり大正八年春小生が福井縣へ轉任間際に突然越後から上京した澤柳壽夫氏の來訪を受け數日滞在せしめ且寸暇を割いて安住の地を奔走したるに意外なる行動に出でられ僕をして「同窓と雖も油断すべからず」てふ觀念を抱かしめたるは甚だ遺憾至極なり畢竟世に言ふ「信州人は喰へぬ」などと云はるゝも君の如き人が裏書きするものである反省を求む

△之は嘗て東京林友で見事であるが日下松本官行造林署にある中垣英一氏(十二回)の誠摯な執務振りを大々賞讃してあつた從來東京管内の風評餘り芳しからざる蘇門系の爲益々自重を祈る

次に大正十年春小生が再度上京東鴨にあつたり其後久原を退いて今は宮城縣にあり目下良配を探しつゝ、ありとどか特に信州人を望む由幸に諸賢の應援を求む阿々以上以上の外六回原離助氏とは未だ面接の機を得ないが大田原及新發田時代の事はオリ、耳にした殊に昨冬小生が浪江に出張するや偶然宿帳にて同氏の一家族の名を運ねたるを見て一層懐しく感せり又十二回の吉川真夫氏とは不幸にして二回の來訪共不在にて會し得ずありたるに偶然にも妻の親戚續きにて氏の寄寓ありたる話出で奇異の思ひを爲したり

青 森 通 信

松 館 藤 太 郎

木曾を立つ時皆から奥州は寒いから綿入を持つて行けと花咲く春四月始めに赴任の際申された記憶は昨日の様な感じがする、然し來て見れば想像と違ふ是も住めば都の譬の様に東北化した爲であらうか
昨今の津輕は如何? 積雪數尺西比利亞直通の西風は日本海を越へ遠慮會釋もなく

友 林 蘇 岐

撫育事業に移る、七月頃よりは普通手入事業になるのだ秋には又新植補植事業があるが植付季節、補植樹種、天然更新革新方法等各方面に問題が多いヒバ林伏條更新は豫想以上の成果を擧げつゝ、あれば將來必ず該方法に餘力を注ぐ事となると信じ自分も當津輕ヒバ林に就てから攻究はして居るが結論は前途遼遠だ造林の豫算も前々年度までは約壹万圓許りに増され之れでも不十分ではあるが最も實地に適合する施業を要求度順によつてやり度いと思つゝ居る

造林擔任者より報導するは潜越であるが序を以て一寸報知する、夫れは二月十五日より三日の豫定を以て青森大林區署所管干係二十小林区署の斫伐主任會議開催の件で我が同窓中出席者は小林、小藤、塩澤、山崎(三)の四君、竹内君は欠席であつた、協議事項は

一、電柱材其の他長材採材に付實行上難易の件
二、斫伐整材に従事せる勞働者の賃金引下に關する具體的の意見
三、前年來より改善考案をなしたつゝ、ある斫伐整材に關する器具機械其の他事務に關する件
四、大正十一年度豫定案に對する事業の經過及分量並に經費の増減過不足に關する件

五、各署よりの提案 以上
但し各項に對する説明は省略

壹月號の林友誌上に特別廣告あり又越畔君からも結束云々の御意見あり小生も此點に就いては十分念頭に持つて居た一体我々實業に従事して居るもの、貴重なる事は經驗にある成功も失敗も皆經驗で吾人が毎日處理して居る業務は皆經驗となつて居る故に此大切なる唯一の機關誌上に各自擔任業務につき今後の計劃、實行中の模様、實行の經過、同結果、結論等を細大漏さず投稿發表するに至らば眞に林友發刊の主旨に叶ひ活躍見る可きものあらうと思つゝ、自己一身上の事許りに没頭し母校を忘れ校風の發揚を忘れたら之れ自滅、死刑宣告者と信する是等の意味を以て前記青森に於ける斫伐主任會議の好機を利用し當大林區管内に籍を有する者及宮城、岩手、青森縣下在職者諸兄の第一回會合を開催せんと自分丈けで意見書も纏めたが都合によつてやめた

諸官廳は一ヶ年中二十日間は賜暇を得らるゝ、し年に一度位は適當の地に集合を期し大いに意見を戦はし度しと考へて居る位置と時期は未定であるが御賛同の様豫め貴意を得置く次第である
今回特別廣告岐蘇林友發刊に就いての向上發展策は無條件大賛成なれば實施を希望する

此稿を草しつゝ、ありしに突然仙臺小林区署に勤務を被命三月上旬赴任の豫定であるが着任後又御通信致す事にして是にて擱筆 以上

襲來し「風は刀の如く雪は矢の如し」所謂有名な陸奥の吹雪を演出し一寸も暗みの事も少くない僅か數丁を離れる署に通ふさび堅固の武裝を整へざる可らず、明治三十五年歩兵第五聯隊雪中行軍も斯くありしかと思はれる日、少くない、然かも山へ僅か一甲這り込むと吹雪は何の威力もなく灰塵を撒きたる如くワクワクと降る許りで當地の柚夫は平氣で伐木に集材に橋出しに従事するのだ

當署昨今の事業は資材九萬石の伐採は二ヶ月前に終へ目下橋出作業中で三月中には之も片付き四月よりは川流し即ち特有の放流堰を利用して流材をなし貯木場へ巻き立てするのだが之も六月初めに終了し之より一部は森林鐵道で青森貯木場迄四十七哩餘の輸送をなし大部分は捲立て貯木場で公、特、賣をするのだ、一方新年度伐木事業は八月下旬頃より繰返されるが伐木運材等の方面に關しては當大林區管内に同窓五人の専門技手が居るから是等の方々の御高説を仰ぐ次第です

自分の擔當、造林方〇は目下積雪期の爲開伐木調査及造林地支障木除却計劃調査並びに葛帳整理等の外何も無いが雪が消へれば皆材地の新植とヒバ前更作業林の補植事業とがある、該補植は當署命名の前伐跡地と後伐跡地との兩個所だが昨今漸くヒバに代ゆるに杉を以て充てる傾向になつて居る之を終へればヒバ林其他人工植栽地の成林

ハガキにて

在安濃津 松 島 生

林友維持問題に關し二月號に長谷川君が具体案を發表せられて居るが僕も此案に賛成する一員である而して林友發行事業を獨立經濟とするに於ては此際之れが維持の資源たる雜誌代金の納入額並納期其他徵收方法等に關する一定の規則を設け林友誌上にも發表して卒業生の諒解を求むると共に雜誌代金の徵收に萬遺憾なきを期せられたし尙會員移動調査の如きも精々正鴻を失せざる様願ひたし (一一、一二、一三、一四、一五、)

同 星 波 生

前略特別廣告により林友維持につき校外會員の賢明なる意見御察り一々誌上に御掲載相成如き消極的御方法により改良の御心組の様察し候へ共解の如き事は林友誌の存在を是認する人々の異論の存する處も存せられず且つ因習久しき情性により潜越乍ら校友中餘り名論所持者も有之間敷と考へ候小生は寧ろ積極的に一定時日を劃して以て不賛成者を徴し適宜意見を取捨直ちに御實行相成可然とさえ考へをり候要は林友誌各部に於ける改善の出來得る限り早々ならんことを望み居り候

彙 報

○第二十回卒業證書授與式

友 林 蘇 岐

三月廿五日午前十時より本校講堂に舉行
本縣よりは知事代理川島學務課長臨席福島
町所在各官公衛員縣郡會議員其他來賓生徒
父兄保證人各位多數の參列があつた岡部校
長症氣々席の爲西澤教諭勸語中村教諭
學事成績報告あり西澤教諭より證書及賞状
の授與訓辭知事告辭あり川瀬本郡長手塚縣
會議員辛木帝室林野管理局技師寺田木會中
學校長蜂谷福島小學校長伊東福島町長近藤
在住新聞記者總代の祝辭安井生徒保證人總
代の謝辭あり頗る眞情を披瀝され校の爲卒
業生の爲眞に難有く感ぜられ今井在校生總
代の送辭原卒業生總代の答辭を以あ靜肅理
に式は終つた

○卒業生姓名及原籍縣名

- 原 金一 岐阜
- 小松 雄二 長野
- 佐藤 鑽守 愛知
- 田中 文正 山梨
- 古畑 豊 長野
- 細窪 文雄 山梨
- 河崎 好生 富山
- 福澤 龍登 長野
- 安倍美千雄 岐阜
- 阿部達三郎 長野
- 池口 元助 全
- 多田 駒藏 山形
- 太田 幸保 長野
- 柳澤 宗重 全
- 河合 幸一 愛知

- 今井 龍雄 長野
- 大池 澄雄 全
- 辻井 誠造 岐阜
- 波羅 作治 長野
- 市川 正 靜岡
- 三輪 正夫 愛知
- 金子 平雄 長野
- 細江 金市 岐阜
- 長谷川史郎 全
- 佐藤 謙二 長野
- 伊佐治彌兵衛 岐阜
- 樋口 靜雄 長野
- 田中 稻實 全
- 中谷 力三 全
- 青木 茂幸 全
- 上島 菊造 岐阜
- 林 廣一 長野
- 松岡 武夫 全
- (舊姓宮下)
- 奥原 亮 全
- 川上 榮司 全
- 青山 泉 岐阜
- 福井 保郎 全
- 相吉甲子永 山梨
- 原 久吉 長野
- 安田 二郎 全
- 上條 高志 全
- 白洲 章吾 全
- 北原 辰男 全
- 松島 正彦 全

- 賞状受領者
- 安江 明耕 岐阜
 - 櫻井 榮一 長野
 - 加藤 浪男 全
 - 長谷川 糾 全
 - 片原 宏 全
 - 平出 耕一 岐阜
 - 清水 恒 山梨
 - 以上五十一人

- 卒業生
- 優等 原金一
 - 在學中皆勤 原金一
 - 皆勤 阿部達三郎
 - 精勤 中谷力三 細江金市
 - 二年生
 - 優等 小野久孝 金井一
 - 皆勤 新井深美 水野作 篠原七木
 - 小野安兵衛
 - 精勤 森田寛雄 平田兵平 岩尾慶一
 - 吉野俊作 小松文明 肥田織三
 - 一年生
 - 優等 猪口來三 土井定士
 - 皆勤 吉田洋一 山田正義 小川治三郎
 - 度會勳道 井上秋夫 今井最明
 - 樋口幸男
 - 精勤 中野善一郎 猪口來三 大岡忠資
 - 野村高次 額進一 原太藏
 - 永井四六 加藤 親 龜子重雄

友 林 蘇 岐

會 員 移 動

- △原川只一君(十五) 山口縣廳農務課林業部へ轉勤
- △井原邦雄君(十六) 上田蠶絲専門製絲科卒業
- △丸山久雄君(九) 日義村宮ノ越分擔區へ轉任
- △大坪時治君(十六) 病氣加療中の處三月廿九日午前十一時死去の報木曾上松町小林鹿太氏方夫人よりあり哀悼に不堪
- △松館藤太郎君(四) 仙臺小林區署勤務を被命
- △輪湖正由(一) 鐵道省大臣官房保健課勤務

編 輯 部 便 り

春よりうるはしい時はありません、高山に雪は斑らよりも多く残つて居ますが里はすつかり春となつてしまひました、梅は咲き櫻は蕾み堇梅は造りつけた様に雑木の時不知は待ちきれぬとでもいふ様に、水仙は稍早く福壽草は過ぎ柳はは、けて了ひました、多くは黄ろい花が多いが道傍や畑の中の紅梅が一番目につきます、葉芽も既に動いて居るであらうやがて花咲き花散り心のやるせない若芽の時となるでせう思へば時の速かなるに驚かれ仕事の進まず殊に本誌編輯の怠慢なる事一番切なくすまないと思

ひます、色々心の苦み多く毎日と延ばして行き又其他の事情が段々差支へてしまひました其中に遂筆はこり難き病となり床に臥す事数日心許りあせつて居ました、期新となり筆又革り熱意を喚起して以て謝罪すべきであると思ひます。

先月號は編輯便りの筆過により編輯部では其處を切り取つて發送致しました。

一月號より特別廣告を以て林友に就いての案を訴へて居ましたが今の大體賛成説のみにて早々實施せよとの事であります多分新學年よりさうなる事と思ひますが發案者なる岡部會長病氣につき一刻も快癒の速かならん事を祈つて居る次第です。

又林友誌に對して御意見の發表をなされたる諸君の勞に對し厚く御禮申し上げます

本誌の誤字脱字等の頗る多いことは實際にて一度御投稿なされた諸君の痛憾措く能はざる處であらうと思ひます、之は編輯部の罪元より大でありますが數號前に方て申上げて置いた通り校正の出來ぬ事が其重大なる原因と思ひます、凡そ校正のない雜誌印刷はあるまいと思ひますが實情は其處に於て詳しく申上げてありますから御再讀何分御含みを願ひます。

文字の正確を計る上より見てもなるべく十九字詰の原稿を御自身御認めの上御送附下さる様願ひます。

此事につき鷹見勳は「其林友とメス」中に於て自ら正誤し越畔山人子は態々數多の

誤りを指摘して手痛く攻撃して來ました一々尤もでありまして鋭敏なる良心の下に綴られたる文章は實に尊重すべきである事を教へられます越畔山人子の攻撃には随分不でありませぬけれども其自己の文章に忠なる延いて岐蘇林友の價値を認め所の精神に至つてはうれしく厚く其希望に沿はん事を期する次第であります、寔に岐蘇林友をよくくすると云ふ様な事は誤字脱字を無くするなどと云ふ事が一番大切と思ひます。

餘白を以て猶編輯子は駄辨を弄せんとします、本號所載の林友とメスに於て鷹見君は林友の形式體裁の改善について論議されて居ますが、兼々編輯子が編輯便りの欄に於て主張した形式體裁の改革希望と今回校友會が特別廣告を以て訴へた經營策の改革案とは全然無關係である事を御承知下さい

即ち鷹見君は林友改善は形式體裁の改善のみ高調されてをるのではないかとの御疑念がありなされるならばそれは誤解である事を申し上げたいのであります、形式體裁をのみ云々したのは全く一個編輯子のみの意見でありまして内容實質の改善こそ常に意ることの出來ぬ事でありませぬ、然してそれは不絶會員諸君によりて叫ばれて居る事を喜びます。

私の考へによりますれば形式と實質とを別々に考へて實質の改善といふ事は林友誌に於ては一に會員全般の責任であり會員全般の手に依らずしては出來ぬ事であると思

ひます少く共投稿者と林友との關係が一番切實であると思ひます即ち職員と在學生と卒業生とを以て構成されたる會員、振へば又林友振ふべし會員振はざれば又林友は振はないでありませう兎に角過去の林友は理論からはさうであつたのであります、そして編輯子が形式としていつたのは編輯子は即ち編輯係である著作者ではない彼の仕事は創作的ではない事務的である即ち形式の改善の義務のみはありと信じたが故であります勿論彼も會員の一人たる以上會員としては大いに其内容實質の改善を助くる責任あるは明かでありませう

■諸君よ林友の内容實質をよくするのは會員諸君の努力に由る何卒振はれん事を希望しますそれが眞の改善でありますとしてその爲に或ひは獨立經濟組織或ひは形式體裁を整へる事は堅切な事であると私は思ひ升

■此號は何だか林友論ばかりですが諸兄の研究文學など多く御投稿を願ひます
 ■なるべく匿名を用ひられない様に願ひます心なき一筆の感情を害する事あり先月號も署名だにしてをけばと後から思ひました
 ●隨筆も發表した以上は責任がありますなるべく實名を以て其出所を明かにしたひと思ひます
 (杉山義次)

◆特別廣告◆

岐蘇林友の改善につき會員諸君よりも種々注文がありますが目下の實情は改善は愚か是が維持に苦心して居る有様です岐蘇林友の發行部数は現在八百部許りで、二百部は在校會員に六百部は校外會員に配付して居ります、而して是に要する經費は年額四百圓許りですが、校外會員より雜誌代として納付せらる、額は年八十圓位のものですから残りの三百二十圓は在校生徒で負擔して居ります校友會の總經費の約四割は雜誌發行の費用に取られますから其の他の校友會事業例へば劍道柔道弓術庭球等の事業や學藝會に關する事業に要する經費に欠乏して何時も困難して居ります斯くまで他の事業を犠牲にして發行して居る岐蘇林友はどうかと云ふに諸君が先刻御承知の通りの有様です、今後年々卒業生の増加するに従ひ發行部数も増加せねばなりません、是迄の通りも新卒業生が五六ヶ年分の雜誌代として一圓五十錢納付せらる、以外校外よりの收入がないとしたならば、漸次紙面でも縮小して維持する外はないでありませう、縮少又は縮少で終に廢刊の止むなきに至るやも知れませんが、明治三十五年以來同窓の濫交機關として發行し來れる岐蘇林友が、叙上の如く維持困難の状態にあることは洵に憂慮に堪へませんから、大正十二年四月以降は左記の經營方法に依り將來の發展を圖りたいと思ひますが、之につき校友諸君の御意見を伺ひたいと考へます。

記

- 一、岐蘇林友發行事業は獨立經濟に依ること
- 二、校友會員たる在校職員生徒並卒業生は雜誌發行の維持費として年額金六十錢を醸金すること
- 三、校友會基金として保管しある金四百圓は之を雜誌發行資金に充つる事
- 四、從來の規定により雜誌付納付のものは三月迄の分を精算し剩餘ある時は四月以降の支出に充つる事

大正十二年三月廿三印刷
 大正十二年三月廿五發行

長野縣西筑摩郡島町四番地
 編輯兼發行人 小柳安正 夫
 長野縣松本市小柳町全番地
 印刷所 淺川吉藏

長野縣松本市小柳町全番地
 印刷所 淺川吉藏
 長野縣西筑摩郡島町全番地
 發行所 廣澤書店

【定價金參錢】